最後の人造人間

灰色鼠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
最後の人造人間

【Ｎコード】
Ｎ３５４４Ｙ

【作者名】
灰色鼠

【あらすじ】
フラスコの中の人造人間騒動後のお話

プロローグ（前書き）

初投稿です。

拙い文章ですが、それでもいいよー、という心優しい方は下にスクロール！

プロローグ

～プロローグ～

禍々しい光が月明かりが差す倉庫でほとばしる。

人体錬成。

それは死んだ人間を再びこの世に甦らそうとする錬金術の最大の禁忌。

人間という生き物はやるなと言われるとやりたくなるものである。

だが、この人体錬成を行った術者は人を甦らそうという意図ではなかった。

部屋一帯に書かれた術式の上に小さな影が重苦しく落ちた。

「痛っ…たいなァ。ど畜生が…」

比較的子供らしい高い声が倉庫に響き渡り、むくりと起き上がった。

肩から夥しい程の鮮血が冷たい床に爛れ落ちていく。

「あの野郎ォ、色々持って行きやがって…」

突如、青い閃光が空を走った。

「さて…と、ここからどうすっかな…」

首を傾げた小さな影は、二つの紅い光を放っていた。

プロローグ（後書き）

出だしから中二病爆発ですね。

こんなかんじで続けていきますので、よろしくお願いします！

キャラ紹介（前書き）

オリキャラと登場人物についての紹介です

キャラ紹介

‥‥主人公‥‥

・限りなくオリキャラです

・名前は後々出てきます

・赤髪紅目

・見た目は１２歳くらい

・腰に刀、着流し、常に裸足

・真理に記憶と両腕を持って行かれました

・何故かはまだ秘密♪

・イーストシティに出没します

‥‥ロイ・マスタング‥‥

・イーストシティの東部司令部で准将やってます

・・・リザ・ホークアイ・・・

・上の准将さんの補佐をしてます

・・・その他諸々・・・

多分後々出すつもりです

ざっとこんなかんじでほのぼの（？）と続けていきます！

プロローグの前書きにも書いた通り、初めての連載で右も左もわからない状態でやっていきますので、拙い文章を読んで頂ける心優しい方、想像豊かな作家様の作品をを横目に『最後の人造人間』を暖かく見守っていって下さいませ。

キャラ紹介（後書き）

ここのコメント何を書こうか戸惑います。
基本書きたいことが無いもんでして…。

次から物語が始まります！

第一話　始まりは朝（前書き）

第一話です！
短めかもしれませんが、楽しんで読んでいただいたらありがたいです。

第一話　始まりは朝

ある寒い日の朝。

青色の軍服を着た女性がある家の扉を叩く。

「お迎えに上がりました、マスタング准将。」

しばらくしてどこか気怠く扉が開き、寝癖のついた髪をばりばりと掻きむしりながら男の顔がひょっこりと覗いた。

ロイ・マスタング。

先日の軍部の内乱以降、大佐から准将に昇級した男である。

「准将、早く支度なさってください。今日も忙しいのですから。」

リザ・ホークアイ。

ロイ・マスタング准将の補佐であり、お目付け役。准将と同じく、軍部の内乱以降、中尉から大尉に昇級した女性である。

「大尉か。すまない、寝過ごした。すぐに支度するから待っていてくれ」

リザは軽く敬礼し、手を後ろに組んだ

「最近ちゃんと睡眠とられてないのでは？」

「全く、君には敵わないな。」

ロイは髪を掻き上げ、浅いため息をついた

「付き合いが長いので。司令部ではサボってばかりなのにご自宅では随分と熱心に仕事なさっているのですね。」

「ほんと、君には敵わない……」

的を射た言葉にロイはがっくりと項垂れるしかなかった。

「ま、いずれはしなければいけないことだ。イシュヴァール人の為にも、殲滅戦で傷付いた人々の為にも。」

先程、軍内の内乱と言ったがそれは表向きの話で、実際は中央に賢者の石を持つホムンクルスという人造人間、その人造人間に唆された中央軍と鋼の錬金術師、エドワード・エルリック等の国家錬金術師や北のブリッグス軍、ロイの部下達の戦いであった。

その戦いは革命軍の辛勝に終わった。ロイはその際に元国家錬金術師のドクター・マルコーにイシュヴァール人らを助けると約束したのだ。

「そうですね。でもまだ先は長いのですから無理はなさらないでくださいね。」

「今日は随分と優しいんだな」

「無理をして体壊した挙げ句、休暇を取られても困りますので。」

「どうやら私の気のせいだったようだ。」

ロイは拗ねた小さい子供の様に口を尖らせた。

二人は東部司令部に着き、指令室の扉を開けた。二人が一番乗りだったようで部屋には誰もいなかった。

「全く、何をやってるんだあいつらは。給料減らしてやろうか。」

深いため息をつき、いつも通り椅子に腰を掛けようとした時だった。ロイの顔色が変わった。

「准将、どうかなされたのですか？」

リザがロイに駆け寄り、目線の先の、机の下にあるものを捉えた。

「これは……！」

そこには、全身に血を付けた小さな少年が体を縮こませて横たわっていた。

第一話　始まりは朝（後書き）

うーん。
前書きも後書きも何を書けばよいのやら……
次話はちょっと話は進むかもです。

第二話　謎の少年（前書き）

第二話目で不定期投稿だな、と自分でも感じるこの頃です。

「文章下手じゃね？」

と思う方！
思うだけにしてください。
私にもわかってますので。

第二話　謎の少年

ロイと紅い髪の少年とただならぬ雰囲気で向かい合っている。

「……何とか言ったらどうだね？」

「……」

～数分前～

「これは……！」

「……子供…だよな」

「……子供…ですね、かなり訳ありの」

少年はアメストリス国内では見慣れない黒の服装おしており、裸足で横たわっていた。

さらに二人を驚かしたことは、今は出血はしていないものの、上半身がべったりと血で赤く染め上げられて、少年の傍らには見た目に似合わない長い刀が置かれていた。

何故このような少年がここにいるのか、何かに追われここに逃げ込んできたのか、考える前に二人の体はすでに動いていた。

「大尉、この子をソファーに寝かせておいてくれ」

「了解しました」

リザはロイの机の下から少年を起こさないよう、そっと抱き上げると、ソファーに寝かせた。リザはその時、少年に対して違和感を覚えた

「これは預かっておいた方が良さそうだな」

ロイは少年の側に置いてあった刀を持ち上げた。

「見慣れない服装だな。シンの子かもしれんな」

「だとしてもアメストリスに来る理由がありませんが」

そうこうしているうちにロイの部下が出勤してくる

「おはようございます……って誰ですか。これ」

ロイ達の次にやって来たのはホットドックをくわえ、軍服だらしなく着ている男、ハイマンス・ブレダ。この男も人造人間との闘いで陰ながら活躍したのだ。

「知らん。私が知りたいくらいだ」

「まさか准将の子じゃないですよね」

ブレダが准将に疑いの目を向ける。

「な……！そんな事があるわけないだろう！……多分…」

「可能性はあるんですね」

「やかましい！」

そんな喧騒の中、起きたのか起こされたのか、少年がむくりと起き上がった。

「あ、起きた」

「ようやく起きたな。私の質問に答えてもら」

少年はロイを一瞥すると話も聞かず再度ソファーに寝転び、寝はじめた。

「寝るな！！」

ロイは質問を無視された事に腹を立てた。少年は眉間にしわを寄せ、不機嫌そうに起き上がった。

すかさずリザが少年の前にお茶を出す。

「ごめんなさいね。うるさくて。良かったら飲んでね」

少年は目を丸くしてリザを見ると唇を横に引き結び、首を横に振った。

「そう。じゃあ、ここに置いておくわ」

リザはお茶をいれたカップをテーブルに置いた。

「すまない。私は子供の扱いは慣れていないのでね」

ロイはこう行った場面でもリザがいて良かったとつくづく思う。

「私は元国家錬金術師、国軍准将のロイ・マスタングだ。君の名前も教えてくれないかね？」

「……」

少年は品評するかのようにロイの全身を見る。その少年の紅い目は、ひどくくすんでいて、まるで魚の死んだ目のようだ。

黙ったままの少年が僅かに身じろぎすると、着流しの袖がするりと肩から滑り落ちた。

「な……！」

ロイは絶句した。なぜなら、少年の肩からあるはずのものが無かったのだ。切り傷もなければ、事故に遭った形跡もない。

「お前……、腕が…」

「……」

先程大尉が感じた違和感とはこれだった。お茶を受け取らなかったのもそのせいだ。一方少年はそれを忌ま忌ましげに見る様なことはなかった。

少年は両腕失ったらしく、垂れ下がった袖をなおせなかった。リザが気遣い、それをなおす。

「何があった」

「……」

「……何か言ったらどうだね？」

少年は一瞬何か考える様に空を見上げると、そのままテーブルの脚を軽く蹴った。その動作は不規則に行われ、けれどもリズム良く音が鳴らされた。

こん、と脚を蹴り終えた後に少年はふっと浅く息を吐き、立ち上がる。それと同時にロイも立ち上がった。

「行こう、大尉」

「は？何を言っているのですか！？」

「命令だ。黙ってついて来い。ブレダ、留守を頼む」

少年はロイのその言葉を聞くと、密かに口角を上げた。

「まあ、大尉がいるからいいっすけど、早く帰ってきてくださいね」

ロイはブレダとすれ違いざまにひらりと手を振った。

准将と大尉は少年に連れられるまま、街の人気の無い廃工場へ来ていた。

「准将」

リザはロイに耳打ちする。

「どういうことですか？」

「さっきあの子は脚を蹴っていただろう？あれはモールス信号なのだよ。『オレに興味が湧いたなら、ついて来い。錬金術師なら尚更な』とな」

「新手のテロでは？」

「可能性はあるかもしれんな。信号を出した理由がわからん」

少年が足を止めた。目的地に着いた様だ。少年が身を翻す。

「始めまして。オレはノワール・ホックス。不法侵入で殺さずにいさせてくれて礼を言うぜ」

これが少年の発した最初の言葉だった。ノワール・ホックスと名乗る少年は深々と頭を下げた。

「軍部と知って入って来たのかね？」

「まさか。寒いし、腹減ってたし、眠たかったから、適当に入っただけだ」

ノワールは肩をすくめ、鼻を鳴らした。

「警備の者がいたのにか？」

「警備？ははっ！そんな堂々と入るかよ」

「ほう。どうやって入ったのかわからんが、まずは君の出所を知る方が先だな」

ロイの目つきががらりと変わった途端、ノワールの表情が曇った。

「……わかんねェんだよなァ。これだけはどう思い出そうとしても、記憶が途切れちまう」

ノワールの紅い瞳が澱んでいく。瞳の中に深い闇が広がっているよ

う。

「だけど、一つだけわかることがあるんだよなァ。それが此処にあるわけだ」

ノワールが倉庫を横目でみる。二人の予想が徐々に悪い方へ向かう。

第二話　謎の少年（後書き）

主人公の
ノワール・ホックスは

ノワール…フランス語で黒。
ホックス…めっちゃ簡単に作りました。

第三話　ノワール（前書き）

今話は色々設定込み入ってます。

ちょっと長いかもしれません……

第三話　ノワール

「大尉、見張りを頼む」

「了解」

ロイはリザとの短いやり取りを終えると、古い金属扉を開けた。埃っぽい空気と共に、血生臭い湿った臭いが鼻の奥についた。

「人体錬成の陣か……！」

二人の悪い予想通りの光景が広がっていた。倉庫の中心には何者かの血溜まりが出来ていた。

「あまり驚いてねェな。もしかして、あんたも経験あるのかな？」

ノワールはその陣の中心に立ち、冷酷な笑みを浮かべてロイの顔を覗き込む。

「……。お前は何を錬成した？」

「オレはオレを錬成した。何の為かは忘れちまった。なんせ代価にしたのは御察しの通りこの両腕と」

ノワールは自らの頭を見る様に上部を見た。

「『大部分の記憶』なわけで」

「……ノワール。自分自身を錬成するには、入口と出口が必要だろう？どうやって戻ってこれた？」

「大方、出口を錬成したんじゃねェの？」

ロイは曖昧なノワールの発言に呆れ、ため息をついた。

「何を覚えている？」

「自分自身の事が少々、錬金術、真理、…くらいかな？」

「ほう、親や住所は？」

「さあ？親はいたような、いなかったような……。住所はないからいないんじゃね？」

ロイは一層険しい顔になる。

「軍部で信号を使った理由は？お前は何者だ？」

「……言えねェな」

「何故だ」

「見ず知らずの奴に情報をほいほい教える程オレは馬鹿じゃねェし、お人好しじゃねェ。
それに不公平だろが。あんたは聞き、オレが答える。オレにメリットが皆無じゃねェか」

ノワールは少し不機嫌になり反論する。確かに誰でもこのような尋問紛いを受けると、不機嫌になるものだ。

不意に扉の外で銃の安全装置を外す音がノワールとロイの耳に入る。

「どうした」

「いえ、何か気配を感じたので」

リザの言う通りで辺りは人一人いないのだが、どこか殺気じみたものが充満している。

「中々勘が良いな。そうさ、この辺りは今の世の中のやり方が気に食わないテロリストの巣窟だぜ。奴サンはご丁寧に狙撃する気マンマンらしい」

そういうノワールの目線の先には割れた窓ガラスの向こうから銃を向け、こちらの様子を伺っている。

「だが、我々を殺すには力不足だな。こちらには『鷹の目』と呼ばれた大尉がいるからな」

「へぇ、あんたが『鷹の目』」

ノワールは二人に聞き取れない音量で呟いた。

「……で？あんたは何の錬金術使うんだ？」

ロイは右手をポケットから手を出す。すでにその手には錬成陣が書かれた手袋を装着している。そこに這っている火蜥蜴が生き生きと躍動感を醸し出している。

「久々にこの焔が使えそうだ」

「いい歳してはしゃぎ過ぎないでくださいね」

「わかってるよ。大尉、援護を頼む」

「言われなくとも」

ロイとリザはノワールをよそにテロリスト鎮圧に走った。

「あーあ、置いてきぼりですか？」

二人の背中を見送ったノワールだったが、多数の背後の気配に振り向いた。

「まァ、こっちも好きに暴れるとしますかね」

「よっ、と」

ノワールは腕のないハンデを背負ってるにも係わらず、大勢の大人達を伸していった。

「オラオラァ！手応えのある奴ァいねェかァ！？」

「なんだ！？このガキ！化け物か！？」

ノワールの動きは見事なもので、男の首に脚でクリンチし、そのまま身体を捻って頸骨を折ったり、巧みに足払いや脚のみで投げ技を掛けたりするなど、戦術に長けていた。

「何押されてやがる！相手は子供だ！」

テロリストが次々に銃を構え、ノワールに発砲する。
ノワールは銃弾を避けるも、頭部に一発銃弾が貫いた。

ノワールの身体がぐらりと傾き、倒れるかとその場の皆がそう思った。が、ノワールの身体は脚で踏ん張り、倒れなかった。

「……いってェな。一回死んじまったじゃねェか。」

ノワールの傷口から赤い閃光が迸ったかと思うと、すぐさま傷は塞がった。だが、それだけでは留まらず、ノワールの姿が変化していく。

「てめェらの冥土の土産にオレの本体見せてやる」

テロリストの前に現れたモノは、尖った耳に、頬まで裂けた口、吊り上がった目、風になびく金色の毛、極めつけは尻から生える九本の尻尾。

「化け物め……！」

熱を纏った巨大な狐だった。

第三話　ノワール（後書き）

あれ？
エンヴィーのパクリじゃね？
と思ったあなた！
後々少しだけ違ったりするかもしれませんね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3544y/

最後の人造人間

2011年11月21日12時04分発行